

Title	新たな拠点にふさわしい対話の場の創造(記憶としての建築空間 : イサム・ノグチ/谷口吉郎/慶應義塾)
Sub Title	Creation of New Interactive Place(Architectural Space as Memory : Isamu NOGUCHI, Yoshiro TANIGUCHI, and Keio University)
Author	芝山, 哲也(SHIBAYAMA, Tetsuya)
Publisher	
Publication year	2005
Jtitle	Booklet Vol.13, (2005. ) ,p.82- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211353">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000013-04211353</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 新たな拠点にふさわしい対話の場の創造

芝山 哲也

新校舎設計提案競技において、萬來舎を含んだ新校舎計画地について考察した際、設計競技要綱で示されたような区画線で切り取られた個別の敷地として捉えるだけではなく、三田キャンパス全体の再構築の中で捉えようとした。三田キャンパス全体の中で捉えたならば、この新校舎計画地周辺は歴史的資産価値が高く、慶應義塾にとって象徴的役割を担う「演説館」に隣接しており、本来ポテンシャルの高い土地である。しかし現状ではキャンパス内で最も手狭な箇所となっており、「裏」の扱いとなっていると言わざるを得ない。それ故に萬來舎は、その名前の由来ともなった「千客萬來」に示されるように「人が集い対話をする」という本来の役割を果たせなくなっている。

そこで新校舎を提案するにあたり、この計画地に「演説館」周辺の緑地と一体化した新たな拠点を造り出すことを目指すと共に、萬來舎内にある「ノグチ・ルーム」「螺旋階段を含むエントランス」等を新校舎屋上の庭園へと移設し、新たな活用を促そうとした。また、萬來舎跡地を「人が集い対話をする」という萬來舎の精神を継承する広場空間として整備する事を計画した。

新校舎自体も、このコンセプトを強化するように計画している。

新校舎東側壁面は、新たな拠点として充分な空間的ゆとりを造り出すよう西校舎壁面と位置を揃えている。今後高層化されていくキャンパス景観を考慮すると、隣棟間隔に余裕を持たせた西校舎の壁面線に揃えるのが妥当であると判断した。更に1階エントランスを約10mのピロティ空間とすることで、新校舎周辺の広場空間に対して、より開放的な雰囲気を与えるとしている。ピロティとは敷地内に広い外部空間を確保する方法として、1階部分を外部に開放して造り出される半外部空間のことであり、アプローチを円滑にするとともに、敷地内の広場として利用されるなど、敷地をより効率よく活用できる利点を持っている。

「ノグチ・ルーム」等が移築される3階の屋上庭園へは、外部から直接

南校舎側から新校舎を見る  
(完成予想図)

アプローチできるように幅7.5mの大階段を設計した。移築後の施設がより積極的に活用されることを意図したと共に、現在自由に利用可能な外部広場空間の少ない三田キャンパスにとって、学生のための新しい憩いの空間となるよう意図している。更に、新校舎内部でも「人が集い対話をする」という萬来舎の精神を継承するべく、様々な形での対話のスペースを計画している。

また、三田キャンパスでは初めてとなるセミアクティブ免震構造を採用しており、「ノグチ・ルーム」など歴史的価値のある物的財産、蓄積された知的財産を大地震から守り、建物機能を停止させない耐久性能および耐震性に優れた構造として設計している。

このように、新校舎計画地周辺について三田キャンパス全体の中で捉えたならば、三田キャンパスが辿った歴史的変遷において、萬来舎の位置付けを言及しなければならないだろう。

### 萬来舎がおかれていた状況

三田キャンパスの歴史的経緯を踏まえると、萬来舎を取り巻く環境には、以下のような状況が生じていたと考えられる。

#### (1) 他校舎とのスケールの乖離

戦後復興期を境に慶應義塾は学生数が増え、大学自体のスケールも拡大した。これは教育の普及という観点からすると望ましいことだが、こと狭隘な三田キャンパスにおいては、それが校舎の高層化へ繋がり、キャンパス景観に多大な影響を及ぼした。終戦直後に建てられた萬来舎はその後の劇的な発展の中で、他校舎と比べ建物スケール的に取り残されてしまっていた。

谷口吉郎とイサム・ノグチが萬来舎を設計した頃、キャンパスは谷口吉郎の秩序ある建物群による豊かな環境の「造型交響曲」が実現していたと思われる。萬来舎に訪れた最初の転機は1960年頃の西校舎、南校舎の建設であり、萬来舎と他校舎のスケールの格差が生じ始めた。次に訪れた転機として、1980年代前半の新図書館、大学院校舎の建設があげられる。これら高層の校舎の建設によって、萬来舎と他校舎のスケールの乖離は明らかなものとなっていた。

1951（昭26）年  
三田キャンパス 配置図

1962（昭37）年  
三田キャンパス 配置図

1985（昭60）年  
三田キャンパス 配置図

## (2) キャンパス景観からの離脱

谷口吉郎による建築群で構成されていた1950年前後のキャンパスは、低層の建物で広く中庭を囲む構成だった。その際、萬來舎は南西の角を固める重要な役割を果たしていた。しかし、現在は大銀杏広場を中心に第一校舎、大学院校舎、新図書館、南校舎、研究室棟等の高層棟が醸したす「囲まれ感」のある領域の外部に建つ。萬來舎はキャンパスの中心から外れているため、学生の空間認知からも除外されているように思われる。原因は大学院校舎の存在によるものが大きいが、別の見方をすると萬來舎が存在感のあるキャンパスのエッジを形成できていないためとも考えられる。結果として、人が集まらないキャンパスの裏手となっていると言わざるを得ない。

1950年代のキャンパスのスケール（学生ホール周囲）

萬來舎と他校舎のスケール比較  
奥：萬來舎 右：西校舎

(3) オーセンティシティの問題

美術にはオーセンティシティという概念があり、本物にのみその価値が存在する。建築・環境芸術の場合、「物質」ではなく「空間」にそのオーセンティシティが存在すると思われる。イサム・ノグチの彫刻の場合、大学校舎が建設された際、位置が動かされてしまった時点でそのオーセンティシティは一部失われてしまった。晩年、三田キャンパスを訪れたイサム・ノグチは、自分の作品の状況を見て嘆いたという。

建物に関しても上記の通り、本来の価値が見失われつつある。更にその利用形態をみると、ノグチ・ルームは管理上の理由で催時以外は学生が自由に入出できない。また、ノグチ庭園に至る建物脇の通路には「立入禁止」の看板が立っていた。これらは明らかに萬來舎の精神に反している。三田新校舎建設の計画により、改めて萬來舎の存在意義についての議論が起こったのは、継承の仕方にも問題があったと言わざるを得ない。

以上のように、三田キャンパスの歴史的変遷の中で、かつては大学の施設として活躍してきた萬來舎は、新しいキャンパススケールの中で新たな活用法を見出す必要があるように思われる。

萬來舎保存計画の変遷

当初コンペ時に我々が提案したものは、彫刻《無》を含む庭園と「ノグチ・ルーム」部分のみを新校舎屋上庭園に移築するというものであった。その後、慶應義塾内でのワーキンググループの設置、有識者からのヒアリング、米国ノグチ財団との折衝を経て、最終的な保存計画が策定されている。

### 1951年 の彫刻の配置

### 建物脇 ノグチ・ガーデンへの アプローチ

2002年8月に基本計画策定作業を終え、基本設計作業が開始された。ここから同年12月までの間に「萬來舎およびイサム・ノグチ作品の取扱いに関するワーキンググループ」が設置され、計8回約30名のヒアリングが実施された。このヒアリングにおいて「彫刻《無》と「ノグチ・ルーム」の方位との関係の重要性」が指摘され、「ノグチ・ルーム」の方位と彫刻《無》の位置関係を従来と同じ状態にするように設計変更を行った。

また、2002年11月、谷口吉郎門下生より谷口吉郎作の螺旋階段について保存要望がなされ、螺旋階段を保存するスタディを開始した。更にワーキンググループの答申を受け、螺旋階段を含む萬來舎南半分の2階部分までを新校舎屋上庭園へ移築するものとし、実施設計を完了した。

更に2004年9月、米国ノグチ財団との会談において、萬來舎のインテリアについて、「保存するのではなく、若い芸術家によって新たに創造されるべき」という提言がなされた。これを受け、インテリアを含む萬來舎周辺のデザインを慶應義塾大学教授でもある建築家 隅研吾氏に依頼し、屋上庭園を含むランドスケープデザインを世界的に著名なフランス人ランドスケープデザイナー、ミシェル・デヴィーニュ氏に依頼することとなった。

またこの過程において、既存萬來舎を現状の位置に残したまま新校舎計画が成立し得るかという検討を行っている。この場合、既存萬來舎（鉄筋コ

ンクリート造2階建)は、新築建物とは構造的に一体とすることは難しく、新校舎は既存建物を避けるように建てことになる。この場合、建物全体を約8.5m西側に移動させる必要があるが、「日影規制」が問題となった。三田キャンパスは研究室棟(昭和42年竣工)が建築基準法上の日影規制に関して、既存不適格の扱いを受けており、敷地全体に厳しい日影規制が掛けられている。今回の計画もその規制の中で最大限の容積を確保するものとなっており、建物の位置、高さについては慎重なる検討の結果決定していた。西側に移動するなどの諸案についても、日影計算を行ったが、規制を大幅に超えるものとなった。

### 保存のコンセプト

萬來舎の精神の再現、歴史的建築物の保存、将来を視野に入れたキャンパス計画、賑わいの場の創出などから総合的に判断し、以下の方針の移築保存による萬來舎の再生を試みる。

- 重要文化財である演説館は物理的に保存する。
- ノグチ・ルームは新校舎3階に移築して物理的にできる限り復原し、イサム・ノグチと谷口吉郎のコラボレーションである作品の空間と精神性を継承する。
- 谷口吉郎設計による建物については螺旋階段とその周りの建物ファサードを復元し、そのモチーフの空間と精神性を継承する。

これにより、以下のことことが保存されると考える。

#### (1) 精神性の保存

戦後の瓦礫が残る丘にイサム・ノグチがアクロポリスを発見した時とは、丘をとりまく環境、丘の意味も変ってきてている。現在の環境を分析すると同時に今後の発展を予想し、稻荷山周辺を含む丘の再発見を試みる。また現在、十分に活用されてない萬來舎を今一度、福澤諭吉の唱えた「千客萬來」の場としての再生を試みる。新校舎計画においては、現実社会に即した複雑なケースに対応できる実学の精神は、塾内外のプロフェッショナルとの対話によって養われてゆくと考え、各所に対話を誘発するような知識・スキル向上の場とそれを支える仕組みを検討している。

慶應義塾が常に継承し続け、イサム・ノグチと谷口吉郎が再現した萬來舎の精神を、更に未来へと継承してゆく必要があるものと考えている。

#### (2) 空間性の保存

移築前の萬來舎では、増設された設備機械やテント庇などによりオリジナルの状態が損なわれていたが、復原の時代設定として、イサム・ノグチと谷口吉郎による純粋なデザインの状態に戻すため創建当時の姿に復帰するものとする。また、談話と思索のための場としてのオリジナルな空間性の保存にも努める。

### (3) 物語性の保存

重要文化財であり、キャンパス内の象徴的な位置に存在する演説館は現状位置に残し、萬來舎を新校舎へ移築保存するという選択肢を探らざるを得なかった。ノグチ・ルームは勿論、そのアプローチに到るエントランス部分・螺旋階段などの周辺部分も保存することによって、二人のコラボレーションの物語性を残し発信していく。また、まさにこの部分が二人のコラボレーションの場となっていたことが萬來舎設計時のスタディ模型とドローイングでも分かる。

### (4) 新たなコラボレーションの場としての萬來舎

米国ノグチ財団からの提言を受け、インテリア等を隈研吾氏が、ランドスケープをフランス人ミシェル・デヴィーニュ氏が設計することとなり、かつてイサム・ノグチと谷口吉郎が行ったコラボレーションの精神を引き継ぎ、現代においても新たなコラボレーションが行われることとなった。そしてこのコラボレーションは、当時と同様に国境を越えた作業となるだけでなく、イサム・ノグチと谷口吉郎の行ったコラボレーションと繋がるであろう、時空を超えた過去と未来を繋ぐコラボレーションとなるはずである。

(しばやま てつや・大成建設株式会社設計本部統括グループリーダー／  
設計・デザイン)

彫刻《無》越しに見る萬來舎

当時の萬來舎模型